

## 【第16回オンライン大会報告記 芥川龍之介生誕130周年—国境を越える芥川文学】

### 第1日目

#### 報告 乾英治郎

第16回大会は昨年度に引き続き、日本での開催となった。専修大学・神田校舎を会場とし、対面方式とリモート配信を組み合わせたハイブリット方式という形で準備が進められていたが、オミクロン株の猛威に鑑み、急遽オンラインのみの開催に変更となった。会長である高橋龍夫氏（専修大学）が「開会の辞」の中で述べたように、次期大会は対面方式での開催を望みたい。

大会1日目は、全体総括を新潟大学の堀竜一氏、進行は上智大学大学院の村山麗氏が務めた。第I部は章瑋氏（筑波大学大学院）と謝銀萍氏（南京師範大学中北学院）による個人発表、第II部は柳本大地氏（広島大学 森戸国際高等教育学院）・フェレイロ・ポッセ・ダマソ氏（同）による共同発表という構成で、司会はそれぞれ奥野久美子氏（大阪市立大学）、西山康一氏（岡山大学）が担当した。

章瑋氏「芥川龍之介「手帳六」考続貂 —「手帳六」の復元とフロイトについて」は、藤沢市文書館所蔵の芥川の手帳を復元する方法の紹介や、既存の全集では翻字されていないフロイトに関するメモの考察を通じて、手帳研究のポテンシャルを提示するものである。

厳密な実証研究に裏打ちされた本発表は、「手帳学」とでも呼ぶべき研究領域を切り拓く可能性に満ちたものであり、会場からも活発な意見が寄せられた。メモが書かれた1921年の時点で芥川がフロイトに興味を持っていたことに関連して、同年は厨川白村「苦悶の象徴」や高峰博『夢学』などを通じて、日本におけるフロイト受容の萌芽が見られていたとの指摘があった。また、元版全集編集時にフロイトの名前が意図的に「隠された」のであれば、編集委員である堀辰雄や佐佐木茂索の意図だけではなく、手帳の所有者である葛巻義敏の意図を考慮に入れる必要があるのではないかとの意見が出された。

続く謝銀萍氏『「申報」と芥川文学』もまた、やはり資料調査に即した実証的な研究の成果である。中国の最初期の新聞紙『申報』（1872-1949）に掲載された芥川関連記事100余りを分析している。関連記事が特に多いのは、芥川自殺翌年の1928年と、芥川賞が制定された1935年であるという。本発表は、芥川の中国観や自殺について論じた記事の紹介を通じて、1920～30年代の中国知識人に芥川が与えた影響の大きさを明らかにしたものである。

会場からは、1928年に芥川関連記事が増えたのは自殺の影響だけではなく、改造社の円本全集が上海の内山書店経由で中国内に流通した影響があるのではないかと指摘や、日本でのマルキシズム的な文脈での芥川観が中国にも影響を与えた可能性についての質問が出された。また、芥川の中国観については『申報』上でもしばしば批判的な記事が見られるが、巴金「幾段不恭敬的話」（1935）を本発表の問題意識の中に位置づけることはできないかといった質問もあり、他の新聞紙の記事を含む同時代言説との比較が、今後の課題として確認された。芥川の中国での関心の持たれ方や評価をうかがい知ることができる、貴重な発表であった。

午後に開始された第II部は、柳本大地氏とフェレイロ・ポッセ・ダマソ氏による共同発表「中

国語を母語とする留学生は「羅生門」をどう読み、どう理解するのか—心理学的・文学的アプローチによる分析」である。「文学作品は人々にどのように読まれているのか」という普遍的な問いに対して、読者論、言語心理学、およびアイトラッカー（視線計測装置）を用いて挑んだ学際的な実践報告となっている。注視時間・眼球の往来といった「視線データ」に基づいて可視化された読者の関心の在処と、読了後の感想の中で示された面白さを感じるポイントとが一致しているという報告は、興味深いものがあった。

人間の文章理解のメカニズムに触れた発表でもあり、会場からも多くの意見が寄せられた。たとえば、今回の実験が一度読んだページに戻れない設定になっていたことについて、芥川のテキストは前に提示された文章が意味を変容させながら繰り返される特徴があることから、ページを戻りながら読む必要があるのではないかとの意見が出された。他にも、漢字圏以外の読者の反応や、テキストの縦書きと横書きが実験に与える影響、被験者の殆どが既読であったという「羅生門」ではなく他のテキストを用いた際の実験結果の変化など、様々な観点からの質問や提言がなされた。発表者自身も、非漢字圏の読者・日本語母語者・文学専攻以外の学習者を対象とした研究を今後の課題として掲げている。

本発表は、文学研究・教育の新たな地平を指し示すものであり、今後益々の研究の発展が期待される。

## 第2日目

### 報告 鈴木暁世

大会二日目は Slack と Zoom を活用したオンライン形式で研究発表とシンポジウムが行われた。

第 I 部は個人発表で、松尾清美氏（専修大学大学院研究生）及び林薫植氏（慶南大学校）の発表があった。松尾清美氏「芥川龍之介の超域性—鸚鵡に関する三作品と「きりしとほろ上人伝」の四十雀について」は、『動物園』の「鸚鵡」「奇遇」「鸚鵡—大震或る覚書の一つ—」「きりしとほろ上人伝」を取り上げ、ルナールやロティ、ヴェルレーヌらからの影響を指摘し、さらにそこに芥川作品における〈模倣〉というテーマが内包されていることを指摘した。林薫植氏「芥川龍之介の「西方の人」論—「10 父」をめぐる—」は、「西方の人」にはイエスの父に関する第 4 章「ヨセフ」があるにも関わらず、「父」というタイトルの断章が載っていることに意図について、芥川におけるキリスト教理解やストリンドベリの影響等の注釈的な方法で考察が行われた。どちらの研究発表もテキストの細部に着目して比較文学的な手法も取り入れた綿密な考察を行うことで、芥川龍之介作品に内包されたテーマを浮き彫りにしようとする方法論で興味深いものであった。

第 II 部は、シンポジウム「国境を越える芥川文学—翻訳、異文化受容、世界文学性」と題し、鄒波氏（復旦大学／中国）、金孝順氏（高麗大学／韓国）、彭春陽氏（淡江大学／台湾）、澤西祐典氏（兼司会・龍谷大学／日本）による研究発表および討議が行われた。

以下、報告者によるシンポジウムについての印象を記す。鄒波氏の「研究型翻訳の可能性—翻訳の現場から」は、翻訳者・研究者である鄒氏による綿密な考証及び注釈による「研究型翻

訳」の試みが報告された。中国における仏文学研究の成果や、「江南遊記」に「地栗」「バク」等中国語方言が使われていることを明らかにした。芥川の「遊記」が、単に〈中国語〉を書き留めただけではなく、様々な言語が飛び交う都市の言語空間を音声的に再現したテキストであることを示したことは成果だと言えよう。形式面における工夫やピジンの翻訳について質問が出、中国語においては一般的な形式ではないルビを導入して多言語空間を再現したという応答があった。

金孝順氏「韓国における芥川文学翻訳の流れ」—日本文学から世界文学へ—では、1945年から2000年代までを通時的に概観し、1945-1959年を日本文学翻訳の不在、1960年代を日本文学翻訳の端緒、1970年代を日本文学の復権、1980年代を翻訳の激増と大衆文学の急伸、1990年代を村上春樹ら「日流」と専門翻訳家の登場、2000年代を文化開放と韓流の影響としてまとめた。質疑応答ではe-bookの特徴と可能性について質問があり、専門家ではない人々による翻訳テキストが溢れている状況であることが示された。芥川の短編がe-bookという読書形態に適応し読者層が広がっているという現象は、鄒氏が試みる「研究型翻訳」とはまた異なる翻訳の可能性を示している。

彭春陽氏「国境を超える芥川文学—翻訳、異文化受容、世界文学性—「羅生門」の中国語訳本の比較研究—」は、30種以上の中国語訳を比較分析し、「暮方の」「下人が」等の翻訳に異同が見られることを指摘した。特に「雨止みを待つてみた」の中国語訳に戦前と戦後に変化があり、戦前までの敗北、陰鬱という解釈が戦後に下人の積極的な生命力を肯定する読みへと変化したことが諸翻訳テキストに反映しているという指摘は興味深い。質疑応答では翻訳に選定されやすい作品・作家についての質問があり、翻訳の対象となるテキストの性格の変化は、韓国及び中国とゆるやかに対応しているように思われた。

最後の澤西祐典氏の「国境を越える芥川文学—翻訳、異文化受容、世界文学性：世界文学にアップデートされる芥川作品」は、シンポジウムテーマに應える前半と「地獄変」の典拠としてピエール・ルイス「緋衣の男」(The Artist Triumphant)を指摘する充実の二部構成であった。

「馬の脚」等の芥川作品に着目し作家本人が身を置いた複言語空間における「翻訳」の位置づけを確認した前半部は鄒波氏の「研究型翻訳」の問題意識と呼応し、芥川テキストがピジン、方言、異言語等の様々な人々の言葉を掬い上げた豊かな複言語空間であることを示していることを再認識させられた。特筆すべきは後半部であろう。何人たりとも描いたことのないプロメテウスを描くために人間の尊厳を踏みにじることを躊躇しない画家は、確かに「地獄変」の良秀と響きあうように思われた。討議では、「世界文学」とは何を指すのかという重要な問いがあり、「世界文学」というタームが特権的な意味合いを引き寄せる危険性や無自覚に使うことに対する疑問について活発な応答があり、充実したシンポジウムであった。